
戯言遣い、東京旅行中。

月野瑠奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戯言遣い、東京旅行中。

【Nコード】

N3484T

【作者名】

月野瑠奈

【あらすじ】

とある経緯により、東京へやって来る事になった戯言遣い。彼が偶然出逢ってしまった、異質な人間とは――！？

（前書き）

本作は、特殊設定のクロスオーバー小説となっております。

原作キャラの設定が変わっていたりしますので、それでもよろしい方は本編へどうぞ。

「よお、いーたん。今から一緒に東京旅行こうぜ」
その言葉を最後に、ぼくの意識は途切れた。

気が付いた時、そこは何処かのホテルの一室のようだった。なかなか豪華な造りになっている。一人部屋のようだが――はて、どうしてこんな所にいるのだろうか。最後に誰かと会っていたような気がするけど、残念ながら全く思い出せない。

何か手掛かりは無いかと周りを見回すと、机の上に書き置きの手紙があった。ぼくがここにいる理由が分かるかも知れない。

とりあえず、読んでみよう。

「いーたんへ。

とりあえず、起きたばかりで何も分かんないだろうから、簡単に説明しとくわ。

今、いーたんがいる場所は東京のとあるホテルだ。

最近京都に引きこもってるって聞いたから、気分転換に丁度いいだろうと思って勝手に連れてきちゃった。ごめんね

私はちよつと仕事があるから、いーたんは適当にぶらついて待ってる。夜に合流しようぜ。」

「……………」

言葉が見つからなかった。

『ごめんね』って……。

差出人の名前は見当たらなかったが、ぼくをここへ連れてきた人物が誰かは分かった。

というか、こんな事をする知り合いなんて一人しかいなかった。

「潤さん……せめて、起きるまで待っててくださいよ」

まあ、用事があったのなら仕方ないけれど。

このまま部屋に居てもどうしようもないので、手紙に書いてあった通り、出掛ける事にする。折角東京へ来たのだ。ゆっくり観光でもしていこう。

備え付けの時計を見ると、朝の七時だった。うん、観光できるだけの時間は充分にある。

部屋に置いてあった荷物（潤さんが用意したのだろうか）を確認してみると、着替えや財布といった、旅行に必要な物が入っていた。全て、ぼくの自宅に置いてあるはずの物だった。

……京都の自室は大丈夫だろうか。

荷物の内の財布をポケットに入れて部屋を出て、下まで降りる。

一階の受付で聞いてみれば、潤さんはどうやら別の、というか、隣の部屋に泊まっているらしい。

……同じ部屋じゃないんだな……いや、そんな大人の展開は期待していないけどさ。

しかし、ホテルを出たはいいが、行き先の宛はまるで無かった。

東京の観光名所といえば、赤いタワーくらいだろうか？

他には――

「……………」

………適当にぶらつくでしょう。

振り返って、ホテルの名前を確認する。入口には『米花ホテル』と表記されていた。

当然の事ながら、知らない名前だった。

当てもなく、ぶらぶらと町中を歩いていく。周りを見渡せば、学生の登校風景が目に入る。着ている制服は見知らぬ物ばかりだったが、その風景は京都とさして変わらない。まだ来て間もないけれど、京都の町が少し恋しくなった。

もともと、無理矢理連れてこられたようなものだしね。

さて、一応観光で歩いているのだから、やはり赤いタワーにくらいは上った方がいいのだろうか。

でもここからもう見えてるしなあ……。

「——それでね！ 仮面ヤイバーが出てきて、怪人に捕まってた女の人を助けたのよ！」

「すっごく格好よかったですよ！」

ふと前を見ると、そこにはこちらに向かって歩いてくる小学生の集団があつた。その後ろには、青いブレザーの制服を着た女子高生が二人。

耳に入った会話の中に、何やら聞き覚えのある単語があつた。仮面ヤイバーって確か、潤さんが見てるらしいアニメの名前が、そんなんだつたような……。

考え込んでいると、不意に集団の中心に居る小学生と目が合った。黒縁の眼鏡を掛けたその子供は、ぼくを見た瞬間、その目を見開いてぼつりと呟いた。

「……人識くん？」

——ぴた、とぼくの足が止まる。

向こうの動きも止まっていて、隣に居る女の子が、不自然に足を止めた子供に呼び掛けているが、子供は微動だにしない。子供の後ろに居る女子高生の一人は訝しげにぼくの方を窺っていたが、そんなのは気にならない。いや、それよりも別の事に気を取られていた。

——まさかこんな所で、その名を聞く事になるとは。

何故知っているのかは気になったが、いくら考えようと本人に聞かない限り、この小さな疑問に答えなど出ないだろう。次に零崎と

会った時、尋ねてみるとしよう。

——先に動き出したのは、向こうの方だった。はつと我に返った子供は、不審に思っていたであろう周囲の人達になんでもないと声をかけ、こちらへと歩き始めた。それと同時にぼくも止めていた足を進め始める。

そのままどちら相手を見る事なく、ぼくと集団はすれ違う。

「——また後で、鏡の裏側さん」

——すれ違いざまに呟かれたそれは、確かにぼくに向けての言葉だった。

しかしその言葉にぼくは振り向かず、きつと彼もこちらを振り向かずに、そのまま前に進む。一人と集団はお互い、どんどん距離を離していく。

振り返る必要などない。

どうせまた——会う事になるだろうから。

あれからぼくは適当に都内を観光していた。のんびりと歩き回り（赤いタワーに上ることはついぞなかった）、昼食を摂った後——ふと、朝の出来事を思い出した。

また後で、と彼は言っていたのだから、やはり米花町内に居た方が良かったろう。

それからずっと、ぼくは米花町内の公園で待ち続けている。時計を見れば、短針は四時を指していた。この公園に辿り着いたのが二時頃だったはずなので、あれから約二時間は経っている事になる。

そろそろ来ても良いはずなだけだ。

近くの自販機で買ったアイスコーヒーを一口飲む。コーヒーの冷たさが、身体に染み渡る。

「……はあ」

小学校の授業時間は、とうに終わっているはず。今は下校の時間帯だろう。この公園は小学校と近い場所にあるから、会つとすればここだと思ったのだが。

言っておくが、ぼくはあの少年と待ち合わせをしているわけではない。それ以前に、あの少年がどの小学校に通っているかなど知っているはずもない。

それなのに、なぜこの場所で待ち続けているのか。理由があるとするれば、ただ何となくだ。

ここでなら多分——彼と、もう一度会えるだろうと。

「——ああ、やっぱりここだった」

声がした方へ顔を向ける。そこに居たのは、朝に出会った黒縁眼鏡の子供だった。

背中のレストランを揺らしながらこちらへ走ってくる子供に、ぼくは声をかけた。

「随分と時間がかかったね。もう夕方だよ」

「悪い悪い、学校の奴らと別れるのに手間取ってさ」

「ふうん」

ひょいと軽やかに、子供はぼくの横に腰掛ける。

「自販機で何か買おうか？」

「いや、いいよ。喉渴いてないし。お兄さんこそ、何か飲む？」

「子供に奢ってもらう程、ぼくは落ちぶれていないよ」

「大丈夫だよ、子供じゃねえから……未成年ではあるけど。待たせたとお詫びも兼ねてつからさ、遠慮しなくてもいいよ」

「……じゃあ、お茶で——」

「五百ミリは却下な」

「……」

自販機を見れば、お茶は五百ミリの物しかなかった。

「……じゃあ、水——」

「五百ミリは却下な」

缶飲料よりも安価だというのに断られてしまった。

一体なぜそこまで、五百ミリが嫌なんだろう。ペットボトルに嫌な思い出でもあるのか……。

というか、ぼくへのお詫びだったはずなのだが、なぜに注文が却下されているのだろうか。

「なんかもう面倒臭いから、アイスコーヒーでいいか？」

「お詫びじゃねえのかよ」

なんで面倒臭がつてるんだよ。

遠慮しなくていいんじゃないかったのか？

「コーヒーは待ってる間に飲んだから、他の飲み物がいいんだけど」

「……無類のコーヒー好きだったり」

「しないよ」

そんなに面倒臭いのか、と問いたくなるほど、彼はコーヒーを推してくる。

実際に尋ねてみれば、「あんだ、コーヒー好きそうな顔してるし」と真顔で返ってきた。

どんな顔だよ。

「コーヒーは嫌いじゃないけど、何度も同じ物を飲みたくはないな。だから水——」

「五百ミリは却下だって。なら、適当にジュースでも買ってくるよ」

「……………」

有無を言わず希望を却下された挙げ句、勝手に中身を決められてしまった。

……最初の言葉は何だったんだ。

「たった」と足音を立てて、彼は自販機の方へ走っていった。何を買うかは少々不安だが、そこまで変な飲み物は販売していないだろう。大人しく待っている事にした。

「……………」

まだ少ししか話していないが——どこからどう見ても、どう話しても、彼は普通の子供とは思えない。

だというのに、何故彼は零崎の事を知っているのか。

あの少年はぼくの姿を見て、零崎の名前を呟いていた。認めたくはないが、ぼくとあいつは確かにそっくりだ。見た目もそうだが、それ以上に中身がまるで鏡のように同じ。

鏡——それがぼくとあいつの関係性だった。

「おい。ぼーっとすんなよ、お兄さん」

顔を上げると、彼は缶を手にも二本持つて、ぼくの前に立っていた。喉は渴いてないと言っていたはずだが、どうやら自分の分も買ってきたらしい。

「……ちよつと考え事をしててね」

「ふうん？……まあ、大体の予想はつくけど」

彼は再びぼくの横へ腰を下ろした。「ほら、嫌いなやつでも恨むなよ。つか残すな」とさりげにきつい事を言い、缶を放り投げてきた。ぼくはそれを危なげなくキャッチする。

一体、どんな飲み物かと見てみれば、缶には『健康一番！百パ―セント野菜汁』と表記されていた。

……あまり美味しくなさそうな名前だな。

隣に目を向けると、彼は既に缶を開けて飲み始めていた。何を飲んでるのやら、缶を見てみると『ソーダ屋さんの左右田さんが飲んだら泡吹いたソーダ』と、何とも飲む気の失せる名前が書かれていた。

もつとマシな飲み物は無かったのだろうか。

「……お兄さん、どうした？ そんなに嫌いだったのか？」

「いや、変わった商品名だな、と」

「確かに名前は変だけど、味は何ともないぜ？ 一回、騙されたと思つて飲んでみるよ」

「騙されたら駄目だと思っけど……まあ、物は試しか」

言われた通り、缶の中身を一口飲んでみる。

どうやら彼の言葉は本当だったようで、別に変な味はしなかった。むしろ、美味しいと言える部類だろう。

「いやはや、何でも見た目で判断するものじゃないな。」

「なかなか旨いだろ？ あそこの自販機の缶飲料、変わった名前の商品ばつただけど、味は確かなんだよ」

「ふうん……缶飲料ってことは、ペットボトルは駄目なのかい？」

「ああ。たとえそれがお茶や水でも、なぜか不味い」

「……だからあんなに却下してたのか」

「飲んだ瞬間に味覚がある事を後悔するようなものを、誰が勧めるよ。それも、人識くんの友達相手に」

「勧めなかった事には感謝するけれど、その表現はいただけないな。あいつは友達なんかじゃないよ」

「え？ でも、この前会った時に言ってたぜ？」

「零崎が？」

「いや、人類最強の請負人が」

「……またあの人が！」

「お兄さんの姿を見た時、ああ成る程、って納得したんだけどな」

「見た目で判断するのは良くないぜ」

「初対面の相手を見た目で判断しないでどうする」

「ごもつとも」

さて、どうしよう。このままでは、零崎と友達だという誤解を彼に抱かせたまま、話が終わってしまう。

いや、別に友達で間違っではないんだけど、それを正直に認めるのは何だか癪だった。

「……おや？」

何だか、話がずれている気がする。

ぼくは一体、彼と何を話そうとしていたのだったか。

「……それにしても、見れば見るほど同一だな。これで本人じゃないんだから、吃驚だ」

「そうかい？ まあ、そっくりなのは認めるけどね」

——ああ、思い出した。

彼に零崎の事を聞くために、ぼくは今ここにいるんだ。

「えーと、君……」呼ぼうとして、まだ彼の名前を知らない事に気が付いた。「そういえば、君の名前を覚えてくれないか？」

「ん、あれ？ まだ言っただけじゃなかったっけ」

「ああ、名字も何も聞いていないよ」

彼と交わした言葉の中には、零崎と潤さんの名前しか出てきていない。潤さんは名称だったが、あれは代名詞みたいなものだし構わないだろう。

「オレの名前は——って言っても、どう答えればいいのか……」

「……もしかして、名前が幾つもあるとか？」

「その通り。偽名と本名、プラス一つで合計三つだ」

「プラス一つ、って……別に教えてくれるのは一つだけでいいけど」

「いや、偽名と本名、両方とも教えとくよ。偽名——今、使ってる名前は、江戸川コナン」

……乱歩とドイル？

ミステリーが好きなのだろうか？

「……続けて」

「ああ。オレの本名は工藤新一。ちょっとは名の知れた探偵なんだけどな。色々あって、名前も見た目も変わる事になっちゃった」

「見た目、も……？」

そういえば、工藤新一という名前は聞いた事がある。確か、『日本警察の救世主』という文句で新聞に書かれていたような……。

……って、ちょっと待て。いくらばくの記憶力が頼りないものとはいえ、これが間違いと言う事はないだろう。新聞には先程の文と共に、でかでかと書かれていたはずだ。

工藤新一は——高校生だと。

「そう。工藤新一は高校生——つまり、こんな姿ナリをしているオレも実際は成人間近の青少年って事さ」

「でも、人が若返るだなんて、そんな事——」

「それがあったから小学生なんてやってんだよ。自分の目で見たものを信じない、なんて人間じゃないだろ、お兄さん？」

彼はひょいとベンチから降り、既に飲み終わっていたジュースの缶を蹴飛ばした。それは綺麗な放物線を描きながらゴミ箱に入っていた。

「なかなかの命中率だね。サッカーでもやっているのかい？」

「元サッカー部なんですね。それも高校時代の話だけど」

「高校時代、ねえ」

言葉だけ聞いていれば成人した大人が昔話をしているようだが、実際に目の前にいる彼は小学生にしか見えない。

先程の話が真実ならば可笑しくはないが、やはり到底信じられそうにない――が。

「本当の事しか話してないんだけどなあ。いくらお兄さんでも、信じるのは無理な話か」

「いや、信じるよ」

「……へ？」

「信じるって言ったんだよ。若返りなんて非科学的な事象はともかく、容姿と実年齢がずれてるっていうのは信じられる」

「……少しでも信じてくれんのは嬉しいけどさ。オレが縮んだ原因は立派な科学薬品だからな」

「……マジ？」

「マジ。因みに、その製作者は朝、オレと一緒に居た奴等の中にいました」

あの普通そうな集団の中に、そんな大それた人間がいたのか。

人は見かけによらないと言うが……。

「頭巾ちゃんとはまるで逆だね……」

「頭巾ちゃん？」

「いや、こつちの話。それで、君は――工藤君は、何かの薬を飲んで、そんな姿になったってこと？」

「ま、そんなところだな。全く、オレはただ、知り合いと遊園地に行ったただけだっつーのに……」

ぶつぶつと文句を言い続ける彼。他愛ない出来事からそのような

目に遭ってしまったのでは、彼もやりきれない思いがあるのだろう。
「ただ、黒ずくめの男をつけていったら、怪しげな取引現場を見る
事になっただけなのに」

「自業自得じゃねえか」

「こちらら探偵やってんだぜ？ 怪しい奴は職業柄、気になっちゃうんだよ」

「好奇心は身を滅ぼす、って言葉、知ってる？」

ぼくの知り合いに『名探偵』という名称で呼ばれた人物が一人、
名乗った人物が一人いるが、彼女達は決してそんな人間ではなかつ
たはずだ。まあ片方に至っては、好奇心で動いたとしても万事解決
してしまうのだろうけど。

全く、同情して損した。

……何だか、だいぶ話が逸れてしまった気がする。はて、ぼくは
どうして彼と話していたのだったか。

「……つーか、お兄さんさあ、オレに聞きたい事あったんじゃなかつ
た？ それとも、お兄さんが聞きたかったのって、オレが小さく
なった理由だったのか？」

「いや、そもそも君が小さくなったなんて知らなかったんだけど」
それに、ぼくは別に何かを聞きたくて待っていた訳じゃないんだ
けどね。ただ気になる事があっただけで……一緒か。

しかし、彼に『お兄さん』と呼ばれていると出夢くんを思い出す。
理澄ちゃんもそう呼んでたけど、工藤君は男だし。

もう少し子供らしかつたら、そう思ったかもしれないけど。

「で、聞きたい事って何だよ？」

「ああ……君は、零崎の知り合いなのか？」

促されたので、どうせならと元々気になっていた事を尋ねてみた。
裏世界の関係者として、零崎の存在を知っている者はたくさんいても、
零崎の人間が知り合いにいる者は滅多にいない。

ましてや、今となっては全滅してしまった一賊の生き残りを知り
合っている者など——いや、あの人間失格の場合はいそんな気がす

る。

「ぼくとか、潤さんとか——どっかの最悪とか。」

工藤君はその質問を聞くと、困ったような表情をした。

「うーん、分かってはいたけど……やっぱりそれを聞くんだなあ」

「駄目だったかな？」

「いや、別に構わないんだけど……個人的に、そう思われるのが嫌なんだ」

「？」

「んー……」

頭を抱える工藤君。

そこまで大変な内容だったのか。

「そんなに嫌なら、答えなくてもいいけど」

「……いや、話すよ。どうせお兄さんだし、大丈夫だろ」

「どういう意味だい？」

「『無為式』相手に悩んだって無駄って事だよ——」

言って、工藤君はベンチから下りると、手に持っていた空き缶をゴミ箱へ蹴飛ばした（二回目）。空き缶がゴミ箱に入るのを見届けると、またぼくの隣に座り直し、こちらへと顔を向けた。

「今から話す事は、表世界の人間には他言無用で頼む。もし話したりしたら、オレはあんたとその関係者を殺さなきゃならない」

「随分と物騒だね」

「それくらい大事なんだよ……で？」

「分かった、誰にも話さない。約束しよう」

「ありがとう」

工藤君は笑って、ぼくに礼を言った。

「じゃあ話すけど、実はオレ、零崎一賊の人間なんだよね」

「へえ」

「……驚かないんだな」

「充分驚いてるよ、心の中で——一賊の人間なら、零崎人識の血縁者、という事になるのか」

「流血という点では、そうなるな。けど、人識くんもオレも、零崎を家賊だとは思っちゃいないぜ」

「ふうん」

なるほど、確かに零崎はそう思っている感じではあったな。

だが、それはあいつだけだと思っていた。聞いた話では、零崎とは仲間意識が異様に強い一賊らしいから。

「あの人達は皆、好い人だ。でも、オレの家族は——父さんと母さんだけなんだ」

そう言った工藤君の表情は、穏やかなものだっただ。

確かに、彼は両親を大事に思っているようだが、一つ疑問があった。

零崎一賊は——

「そう、零崎一賊は殺人鬼の集団。理由なく殺す、殺し名。ただの人間だったはずなのに——突然、鬼へと変わる。それが何か？」

「じゃあ聞くけれど——零崎の者だというのなら、君も殺人鬼であるはずだ。なのにどうして、家族と暮らせる？」

「……………」

「どうして——表で普通に生きられる？」

「……なんか勘違いしてるようだけど、いくら殺人鬼だって、会った人間全員を殺す訳じゃないんだぜ。本能くらい、我慢できる」

「だからって」

「それでも理由があるとするならば、オレが殺人鬼じゃないからだろうな」

「え？」

殺人鬼じゃ、ない？

零崎なのにな？

「人識くんが零崎の異端なら、オレは異常——否、異外かな。オレは生まれてこの方、人を殺した事がないのさ。それで殺人鬼なんて、名乗れる訳ないだろ？」

名乗る気もないけどな、と工藤君は続けた。

「……それなのに、零崎なのか？」

「ああ。殺人行為は犯さなくとも、殺人衝動には侵されてるんでね。それ以上に——他の零崎がそう言うんだ。それが何よりの証明さ」
そう言って笑う姿からは、零崎である事を嫌っている雰囲気はない。

それはどこか、あの人間失格に似ていた。

「殺人衝動があるのに、よく家族を殺さなかったね」

「我慢したんだ、当たり前だろ。それに、人が死ぬのは嫌いなんだ」

「殺人鬼なのに？」

「違うって言うてるだろ」

「言ってないよ」

「じゃあ、今言った」

「適当だなあ」

まるで子供みたいな事を言う。見た目はその通りだが、本人の話では高校生なのだから、騙されてはいけない。

「人の命つてのは、そんな軽いもんじゃないんだ。オレはしばらくの間、裏世界にいた事があるけど……あの世界といたら、やれ殺し屋だ、やれ暗殺者だ、やれ死神だと、簡単に殺人する奴らばっかだ。人を人とは思わない——人が人とは思えない者達しかない」
「まあ、そうだね」

「だからオレは表で生きてる。人を殺したくもないし、殺されたくもないしな」

「ぼくも嫌だな。殺す事も、殺される事も、どっちも」

「普通はそうさ——オレは怖いんだよ。誰かに殺されるのが。誰かを——殺すのが。オレは鬼になりたくない、人間として生きたいんだ。人で在るために、オレは今までも、これから、誰も殺さない」
決意に満ちた表情で、工藤君は言った。

きつと彼は、ただの人間であろうと頑張っているのだろう。消える事のない衝動を厳しく律して、一般人として生きている。

それはどれだけ、大変な事なのか。

「裏世界にいた時、オレは周りの奴らがずっと怖かったよ。たとえばそれが零崎の人間でも。今だってオレは、あの暴力だけの日常に恐怖している。そしてお兄さん、オレは、お兄さんの事も怖い」

「ぼくも？」

「死んだ人間のような瞳が怖い。欠陥すぎる性格が怖い。鏡の裏側である存在が怖い。四つの世界全てを生きられる最弱が怖い。なるようにならない——彼の人類最悪と同じくらいの最悪が怖い。オレは、お兄さんの全てが怖いんだ」

「……………」

同じような事を、以前にも言われた事があった。

その時、既に分かりきっていた事を、改めて思い知ったのだ。

ぼくは——普通じゃあ、ない。

……………。

それでも。

「それでもぼくは、表の人達と一緒にいたいんだよ。たとえ普通じゃないからって、それが一緒にいられない理由にはならない」

「……………」

「君だって、そうだろう？」

鬼で在りたくないと思んだ君なら。

人で在りたいと願った君なら。

ずっと、思ってきたはずだ。

「だからぼくは、ここから立ち去ったりしないよ。たとえ君が、嫌がっていてもね」

「……………なんか、思ってたのよりも質が悪かったな。人識くんの話よりも数倍酷い気がするぜ」

「百聞は一見に如かず、ってね。人の話は大抵美化されるものさ。大体、ぼくを最悪と評したのは君だろ」

「ああ、そうだったっけ？ ……でも、この分なら大丈夫そうだな」
「ん？」

「あんまりぶっ壊れた奴なら、再起不能にして帰そうと思ってたん

だが——それくらいなら大丈夫だ。ま、元々無為式相手に何とか出来るとは思ってなかったからな」

そう、工藤君は笑って言うが、その内容は見た目とは違いとても物騒だ。

本当に殺人鬼じゃないのか？

「……殺しはしないんじゃないかった？」

「殺しはしないけど、半身不随とか精神攻撃は出来るから」

とんでもねえ人間だった。

「裏世界にいた頃も、そういうのは山ほどしてきたからな。選手生命くらいは殺すさ」

「選手生命って……」

「オレが零崎をする場合、全部その類になるんだ。そのせいか、裏の人間からは『不殺の殺人鬼』なんて呼ばれてよお。せつかく人殺してないのに、これじゃあ意味ないじゃん！　と思って、それからは『不殺人者』^{ライフキリング}って名乗ってる」

「はあ」

何というか、果てしなくどうでもいい話だった。

「どうでもよくない！　大事なところだ！」

読心術！？

「顔に書いてあるぞ」

「そうかい？　困ったな。ぼくは根っからの正直者だから、こういう時は嘘がつけないんだ」

「戯言遣いがよく言う……ああ、もうこんな時間か。そろそろ帰らねえと」

そう言って、工藤君はベンチから下りると、ぼくの持っている空き缶を奪い取って、ごみ箱に蹴飛ばした（三回目）。ぼくはそれを無視して、公園の時計に目を向ける。時間は五時三十分。もう夕刻だ。

工藤君とは一時間以上も話していた事になるが、はたしてそれは有意義な時間となっただろうか。

「あんまり遅いと、居候先の家族が心配するんでね。小学生も大変だぜ」

「居候先って……両親はどうしたんだ？」

彼は両親の事をそれは大事そうに話していたから、家族仲は良いと思うのだが。

「親はアメリカに在住中。その間はオレ一人で暮らしてたけど……まあ、見ての通りになっちまってね。それから正体を隠して、幼馴染みの家に居候させてもらってたんだ」

「そう……両親は今の君の事を」

「ちゃんと知ってるよ。その上で、あの人達はオレの好きにさせてくれてるのさ」

「……良い両親だね」

「まあな。そうでなきゃ、オレみたいな零崎がいる訳ねえだろ」

「それもそうか。じゃあ、その居候先の幼馴染みは知ってるのかい？」

「……………」

それを聞いた途端、工藤君の表情は一変して苦いものになった。地雷でも踏んだかな？

「どうしたんだ？」

「いや、うん……そいつにも、そいつの家族にも、オレの正体は秘密にしてるよ。何回かばれそうになったけど、良き理解者が協力してくれて、何とか誤魔化せてるってところだな」

「どうして話さないんだい？」

「オレが子供になった経緯、話したろ？ その原因の黒ずくめが、結構やばい組織でさ。話して巻き込みまったら嫌だからな」

工藤君の目には、人を殺さないと言った時と同じ、揺るがぬ決意の色が見えた。

「……よほど、その人達が大事なんだね」

「ああ。家族と同じくらいな」

「零崎の人間は、大事に思っていないのかい？」

「大事さ。たとえ、家族と思えなくとも、な——やばい、マジで帰らねえと」

腕時計を見ながら言う工藤君。確かに、もう小学生は帰るべき時間だろう。道も暗くなってきた。

工藤君はぼくの方に向き直ると、言った。

「今日はありがとな。会えて、結構楽しかったよ」

「こちらこそ、面白い話が聞けて良かったよ」

「これ以上ない傑作だったろ？」

「なかなか見事な戯言だったよ」

どこかの人間失格と会った時のように、ぼく達は言葉を交わした。これからぼくは潤さんと合流し、ホテルに戻って適当に一日過ごした後、京都へ帰るのだろう。元々は誘拐のように始まった東京旅行だったが、今回の事を思えば、決して悪いものではなかった。

——そういえば。

「工藤君」

「なに？」

「最後に、君の名前を覚えてくれないか？」

ぼくの突然の言葉に、工藤君は一瞬ぼかんとした後、にこやかに笑った。

「そうだな、では改めて自己紹介を——表の名前は江戸川コナン。真の名前は工藤新一。そして、裏の名前は——零崎解識ぜろさきかいしき」

「ぼくは本名を名乗らない主義なんでね。今まで呼ばれた愛称は、いーちゃん、いーたん、いの字、いー兄、いのすけ、いーいー、いつきー、師匠、戯言遣い、詐欺師。好きに呼ぶといい」

「んじゃ、お兄さんで」

「変化なしだよ」

「機会があつたら、いーさんとでも呼ばせてもらつた」

「どんな機会だ」

「それじゃあ自己紹介もすんだ事だし、これにてお開きって事で」
工藤君は公園の出口へと走っていく。

もう彼と会う事はないだろう。ぼくの在住は京都だし、滅多な事ではここまで足を伸ばさない。

ぼくも帰ろうかと思っていると、不意に工藤君が出口の手前で止まって、こちらに向き直った。

さっきまでとは違い、子供のように手を振っている。

「さよなら、戯言遣いのお兄さん——縁が合ったら、また会おう！」最後に人類最悪の言葉を紡いで、工藤君は帰っていった。

懐かれたのか、嫌がらせなのか。

結局、どちらだったのかを知る事なく、ぼくもホテルへの帰路についた。

その後、潤さんと合流した際に工藤君の事を聞いてみた（彼が話すのを禁じていたのは表世界の人間相手のみだったので、この赤色は範囲外だろう）。

すると潤さんは、

「おう、知ってるぜ。あいつ、面白い奴だろー」

と、笑いながら彼の事を話してくれた。

何でも、零崎らしからぬ零崎との事。

それはそうだろう。彼は殺人鬼ではないのだから。殺人鬼ではない事を、信条としているのだから。

零崎解識。

人を殺さぬ、殺人者。

潤さんはその後「いーたんみたいなツンデレだよな」と続けたが、それは聞き捨てならなかったので否定しておいた。ぼくのどこがツンデレなんだか。

潤さんと別れたてから、ぼくはホテルの自室に戻って（潤さんはまだ何かやる事が残っているらしく、一緒に部屋まで戻らなかった。相変わらず多忙な人だ）ベッドで休んでいる時、ふと零崎の事を思い出した。己を殺人鬼と肯定するあいつは、今は人を殺さないようにしているらしい。ならば今も、遠いどこかの土地で本能を封じているのだろうか。

今日出逢った彼と、同じように。

「零崎にとって殺人は、呼吸をするのと同じだ」

これは零崎が話した事だが、だとすれば、一度も殺人を犯していない彼は、はたして生きていると言えるのか。

答えは簡単だ。

だって、彼は殺人鬼ではないのだ。

人として生きている彼に——鬼の理論など、通ずる訳がない。

「——まあ、結局は戯言なんだけどね」

（後書き）

初めまして、月野瑠奈と申します。

この度は『戯言遣い、東京旅行中。』を読んでもうございまして、ありがとうございます。

本書はコナン×戯言シリーズのクロスオーバーとなっておりますが、いかがだったでしょうか？

突発的なネタから始まったものでしたが、作者は最後まで楽しく筆を進ませていただきました。

それでご満足いただけたのなら、作者として嬉しい限りです。

ではここで、ちょっとしたキャラ設定をご紹介します。

零崎解識（ぜろざき・かいしき）

『不殺人者』。

零崎一賊となつてから一度も殺人した事がない、異常で異質な零崎。

裏世界にいた事はあるが、知り合いという知り合いは一賊以外にいない。

元々は『不殺の殺人鬼』と呼ばれていたが、本人は殺人鬼である事を否定しているため『不殺人者』と名乗り始めた。現在は裏世界から身を引いているので名は通っていないが、それでも定着はしている。

相対しても殺される事はないが、裏世界に生きるための力を全て殺される。

命を殺さず、未来を殺す。

生殺し。

工藤新一としての探偵業は、昔からの夢（この辺りは原作どおり）。

裏世界から離れる際に、零崎（殺人鬼）としての技術を全て封印している。

そのため、使える力は体格相応のものだけ。

そのせいなのか元からなのか、一賊を感知する能力が異様に強い。解識は最初から武器を所持していないため、『不殺人者』という名称は『自殺志願』や『愚神礼賛』とは違い武器の名称ではない。

……あれ、長い。

ひとまず、零崎の設定はこういうものとなっております。

この短編を元に、新たに長編を執筆する予定があったり、なかったり。

まだまだ未熟者ではありますが、もしも次の小説も読んでいただけるその時は、どうぞよろしくお願いいたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3484t/>

戯言遣い、東京旅行中。

2011年5月17日21時55分発行